

める青春



矢野栄蔵

南方社

ある青春

一九七九年九月十五日発行

著 者 矢野栄蔵

企画製作 ルーム・ド・ポエム

〒662 西宮市神園町七一二五
電話 〇六(七二)五四八五

発行所 南方社

〒560 豊中市岡町九一六
電話 〇六(八四二)五九二一

定価 一、二〇〇円 0093—2901—5646

印刷／株式会社 小西印刷所

目次

ある青春	3
竿灯ながれ節	25
尾瀬アルパイン特急	57
のみやいろ街	101
レーサー志望	133
デス・ランナー	155

ある青春

練習を見ているかぎりは○勝三〇〇敗の高校野球チームとは信じられなかった。シートノックにボロはでないし、フリーバッティングは長打こそ少いが短打戦法ならば結構いける。

東西高校野球部は負けチーム記録の更新中である。

公式戦では、全国高校野球大会の五十年間連敗記録保持高校である。

しかし、この連敗がかえって東西高校の名誉を高めている。野球は弱いが一流大
学合格者数では、毎年高打率を誇っているからである。

沢村 勝治 元プロ野球選手、スポーツ用品店経営

沢村勝治は東西高校校長とPTA会長の説明を受けながら、無田野球部長がひき
いる東西高生の練習試合を観戦中であった。

「努力すれば勝てるな」初夏のグラウンドは結構暑い。冷やし麦茶を飲みながら

沢村は言った。

「おい、おい困るのだよ。絶対に勝っては困るんだよ。負けるも伝統だ、伝統があるノ」沢村を次期監督に要請しているPTA会長が言った。

沢村勝治は元プロ野球選手の肩書で草野球の面倒もみている。当然、観戦に熱が入って技術的な評価になった。

「けったいやなあー。やりがいがありま、すなあ」思わずありませんと言いかけて、今までになったことのない高校野球の監督を引受けてみようと思った。

目立つようが目立たない野球チームが東西高だった。高校野球全国大会の予選シリーズになると、東宮市でも公立、私立から野球の名門校が浮上してくる。大会グラウンドは市営球場を使う。これがまた市民に熱狂的に受ける。

東西校は連敗記録を更新中である。野球ファンは連敗記録など問題にしない。

が、東西校では一人の監督にじつくりと、数年間も監督をさせない。学校ぐるみ、PTAぐるみで私立の名門の伝統校を守りきろうとする。答は単純なのであ

る。野球が強くなればスポーツ選手などが押寄せる。スポーツに時間をとれば勉強ができない。勉強できない学生が多いと大学合格率が低下する。

東西高等学校創立五十年祭に沢村勝治は出席している。二次会で東西校のかつての監督だった人たちの、五人ぐらいに沢村は会っていた。いや、校長とPTA会長に言っておかせてもらったのだ。監督交替は一流大学合格数の低下で決定されるようだ。だいたい合格数など毎年違うものなのに、前年度より減ると先ず野球部監督の首がない。

「これは磨けば勝てますよ」元プロ野球選手が発言するものだから、校長とPTA会長はあわてた。

「勝つことはPTA会長たる、わしが退いてからに願いたい。沢村君」

それが本音に違いないと沢村も思っていた。

誰もがわが身が可愛いのだ。可愛そうなのは野球部員だとも思った。だが、練習をやっても勝てない野球部にどうして生徒が集めるのかとも思った。

東西市、人口、十万人。東西高校生六百人。野球部員五十人。

沢村勝治は連敗記録更新中のチームであるにもかかわらず、どうして元プロ野球、社会人野球チームから引退した人たちが、東西高校監督に就職するのかわからなかった。

だが、これだけは世論がつくり上げた評価があった。優秀な監督、コーチの交替でなお勝てない東西高校は、野球選手に向かない子弟が多いのではないか、その証拠に試合に勝てない、だから勉強に向いている人間が集ってくるのであるという評価だった。

五十年も連敗していると伝説も生れるだろう。また、PTAはのために更に優秀な人材を東西高に勧誘しているようだった。

「校長先生。PTA会長。ぼくは東西高校の野球部監督を引受けましょう」練習試合のあと校長室へ戻ってから沢村は言った。

沢村勝治が自宅に戻ったときは午後十一時を過ぎていた。スポーツ用品店は妻の

手腕にまかせようと思った。草野球を手伝っているときも店番はせず、東西高の監督では完全に手を抜いてしまう。今よりも頭が上がらなくなるが仕方がないと思った。

「俺、監督になった」愛妻の峰子は起きて売上台帳に記入中だったが、沢村が帰宅の挨拶をすると顔色が変わった。

「駄目だと言ったのに。来客の相談。電話の問合せ。子供の世話。姑の世話。仕入れ。店番、炊事洗濯に掃除。いったい誰がするのです。収入が減るのですよ」顔色が変わるだけではなかった。すつくと立上がると子供の玩具箱から硬質ビニールでできたバットを引抜くと手に取っていた。

沢村も反射的に立上って硬質ビニールバットを抜いた。これまでとまったく同じ夫婦喧嘩の形態だった。子供が見ていようが見ていまいが、腹が立つとどちらからともなくバットを手にするのだ。それを手にすると剣道のようにわたり合うのだ。た。

午前九時から午後三時まで夫は絶対にスポーツ用品店の店番をする約束で、夫婦の話し合いがついた。

沢村は午後三時十分には東西高校の校庭に到着した。毎日十分間の遅刻は仕方なかった。

沢村が校庭に現われるまで野球部員が交替でキャッチボールをしている。沢村が到着すると全員が彼の前に整列し、無田野球部長が沢村を紹介した。

「沢村さんはまだ皆んなの記憶に新しいスポーツ選手です。輝やかなしい戦績は将来、きっと目の目をみることでしょう。学校はたとえ一勝でもするために、優秀な人材を投入してきましたが、今年は安心して下さい。生徒の信望。責任感。このどちらにも信用のできる沢村勝治新監督を紹介します」

沢村はけったいな紹介の仕方だなあと思った。何が一勝なものか。全敗記録の更新ではないのかとも思った。

野球部員代表で三年生の舟木が沢村に挨拶した。

「ぼくたちは正々堂々と戦いましたが敗れてきました。是非、新監督の技術でもって東西高校の野球部の不名誉な記録に終止符を打って下さい」

何故、〇勝三〇〇敗まで来たのか、が沢村の第一の疑問であった。

第一は学校側の戦意喪失である。

第二は選手の勝つ意欲についてであった。

沢村は東西高の野球部長無田と、専任コーチであるOBの林の二人を学校側から取上げられた。

負けるためには新しい専任コーチが、これまでどおり着任するからである。

沢村が考えるかぎり、東西高のまぐれ勝ちのチャンスも三〇〇回のうちには少くとも幾度かはあったと思う。それでも勝てないのは、明らかに沢村が監督就任で要請を受けたとおりに筋書があるらしい。

沢村勝治が監督兼コーチに就任して、第一戦は西宮高との練習試合であった。沢村は選手の気ままに試合をさせた。サインの動きはとったが、ノーサインと同じで

あった。選手の判断で試合が終了すると7対0の負けとなった。ピッチャーの出来が試合を決した。

第二戦は翌月に南宮高との定期戦だった。東西高は37連敗している。打撃戦となつて15対10で負けている。

七月になった。東西高野球部の自主キャンプの始まる月である。七月の初めから中旬にかけて夏期強化合宿をする。学校の近くの寺にこもり、週に一回は帰宅を許すがあとは泊りこみの練習となる。

沢村はその最初の夜に、もっとも選手たちに聞きたいことを尋ねた。全員が本堂に集まったときに質問した。

「東西高は何故、負けるか答えられる者はおるか」と沢村は訊いた。

沢村はこの質問のときにおやつと思った。草野球チームのアドバイザーで質問したときは、負けこんでいるチームの選手は恥ずかしいのかうつ向いた選手や、顔が赤くなる者もいたが、東西高野球部員は負けて当然という顔ばかりであった。

「負けてくやしくないか」と沢村は重ねて聞いた。

一人三割を打っている三年の大沢が返事した。

「監督。どうして負けるのか不思議なんです。確率からいえば負けるのは不思議でもありません。全国高校選抜野球では第一戦に勝つには二分の一しか確率はありません。つまり毎試合、二分の一しか勝つチャンスはないのです。東西高にはその二分の一のチャンスがいつきたのか。ぼくの統計では毎回二分の一のチャンスに負けているのです。一試合に九回のチャンスがありながら、そこでは勝っているときもあるのです。だが九回裏には必ず負けと出るのは何故か。この原因を監督にきかれても、ぼくたちには答えがでないのです」

補欠の木田が手を上げて質問してきた。

「東西高のいかなる試合でもうちの両親は心配でご飯がのどに通らないそうです。ぼくが家に帰ると試合を細かく説明させて、まるで映画のストーリーを話させているようなものです。ぼくの話に興奮しているので、まったく親なんて何を考え

ているのか不思議なんです」

それには沢村は適切な受け応えはできなかった。東西高の敗戦を一番願っているのは、選手たちの母親だからだ。

沢村が校長やPTA会長に説得されたのは、いつ勝つのか、そんな地力がついている現在のチームが原因であった。早く解明して、勝つ能力を沢村の手で消すことだった。打者か投手陣か、そのいずれかはすぐに解明できた。

東西高では進学率は一〇〇パーセントに近かった。卒業生二〇〇人。東大一〇パーセント。有名私大四〇パーセント。四九パーセントは他の国立大、その内の若干がやむなく就職もしくは浪人となっている。

沢村は三塁手で四番を打つ大沢に進学の抱負を聞いた。

「親父の会社が倒産して、金が欲しいと思います。ぼくを育ててくれた恩のためにもプロ野球選手になろうと心に決めたのです。東西高校ではプロ野球から勧誘の話など聞いたことはありません。ぼくは高校で名前を売って、入学した大学で野球

青年としてスタートしたいのです」

大沢の素振りは毎日一千回だそうだ。沢村は大沢の野球に対する情熱を、他の東西高の野球選手も受け止めているものと思った。大沢が金のために野球で頑張るということを沢村は知った。試合ではホームランで一発きりでも東西高に勝つチャンスもあろうというものだ。

沢村は金銭に執着しだした大沢を責める気はなかった。家が倒産では学費の捻出も困難だろうと思うのだ。

沢村は大沢の件は校長に報告した。大沢の発奮で勝つ意欲が東西高にできては困るのだ。それで大沢は育英資金の援助を受けるようになった。

第三戦は北宮高との試合だった。二対〇で東西高は敗れた。投手に抑えられたのだ。大沢は学費の心配がなくなつて素振り一千回は中止しているので、打球の当たりが弱くなったようだった。

いよいよ夏の全国高校野球選手権大会の予選シーズンに入った。沢村は激をとば